

Title	幻想の島沖縄：鷹の渡り (伊良部島)・海蛇漁 (久高島)・梶の木 (津堅島) についての断想
Sub Title	Okinawa as islands of fantasy
Author	藤原, 茂樹(Fujiwara, Shigeki)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2016
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.110, (2016. 6) ,p.141 (130)- 152 (119)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2015年度藝文学会シンポジウム「幻想と文学」 開催日: 2015年12月11日 (金) 場所: 慶應義塾大学三田キャンパス北館ホール 冊子には前からの通しページあり
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01100001-0141

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

2015年度藝文学会シンポジウム「幻想と文学」

幻想の島沖縄

— 鷹の渡り(伊良部島)・海蛇漁(久高島)・梶の木(津堅島)についての
断想 —

藤原茂樹

藝文学会のシンポジウムで話しをするようにと依頼を受けたときに、「幻想」がテーマであることと、沖縄の話をしてくれということでした。これまで幻想ということでものを考えるということは私の専門領域ではなかったことでしたので、申し出をお断りしたのですが、退いてゆく人はシンポジウムに出るのが役目だということでしたから、この場にいることとなりました。そこで、本土にいる人が、幻想的な何かを沖縄に感じるがあるとすると、それはそれで理由があるであろうということ、ヒントにして、以下短い話を三つしておきます。

一 鷹の渡り 伊良部島のサシバ

サシバのこと 2015・9 白樺湖～10 伊良部島(写真1)

副題の一つに「鷹の渡り(伊良部島)」と書きました。渡りをする鷹は、数種いますが、中でもサシバ(差羽・鶯)という胸に縞模様のあるきれいな鷹。全国に、鷹の渡りを観察する会が連携して、各地の渡りの状況が逐次アップされます。2015年の場合、サシバ・ハチクマ・ノスリ・ツミなどの鷹が、たとえば信州白樺峠



写真1

での観察によると、9月から10月にかけて飛び立って行ったとのこと。白樺峠の観察では合計17000羽ほど。サシバは其中で特に多い鳥で、上昇気流が起ると、数知れぬサシバたちが群れをなして大空へ向けて急激に気流ののって上昇してゆくのです。その壮観は鷹柱といわれます。気流に乗って南をさして集団でつぎつぎに飛び去る。サシバに焦点を絞りますが、その他の山々からも飛びたったサシバが集結するのは、本州では愛知県渥美半島伊良湖岬。飛び立っただけで、中には、老いたサシバや幼鳥、けがや病気のものがいて、そこから海へ飛び立つことをあきらめて、群れから残されるものがあります。これを落鷹といっています。ここまで来たが、遠くへはもう飛べなくなったので君たちは行ってくださいというようなことです。

鷹一つ見つけてうれし伊良湖崎（『笈の小文』）

芭蕉がみたのは、そうした鷹だと思います。いまの伊良湖岬では鷹の監視カメラが常置されていて、インターネットを通じて、タイミングが合えば渡りを観察できると思いますが、私は成功したことがありません。群れは岬を飛び立つと鹿児島県の佐多岬まで飛び、さらに、徳之島、沖縄と経由してゆきます。私は、沖縄本島の北部・山原の比地というところで、一羽残って村はずれの叢林で飛ぶ孤独な鷹を何度か見たことがあります。今年の二月には、南部の久高島でもみかけています。サシバはさらに南に飛んでゆきます。沖縄本島までは、鹿児島からいわゆる道の島といわれる島々が点々とつながっているのですが、沖縄本島から宮古島までは、間に島のまったくない250キロほどの長い距離があり、その海を一気に渡ってゆきます。たどり着くのが、宮古島、中でも伊良部島・下地島はサシバが多く飛来する島です。長く飛んできたサシバは、島の叢林に羽を休め眠りに入るのです。それがちょうど10月の半ば頃。宮古島は、サシバの一大集結地であります。サシバは、宮古島を飛び立つと、台湾満州郷で休み、つぎにフィリピンバタン島にゆき、ここからインドネシアの諸島の広範囲で越冬するとのこと。

ところで宮古島は、山といえるようなものをもてなかった島で、最高峰が野原岳という108メートルの丘程度のものがあるにすぎません。そのことは、島民の生活に大きな影響を与えていて、ずいぶん昔から、鹿も猪も生存せず、必然動物性たんぱく質の不足する苦しい環境下で人は生活を余儀なくされていたことを理解する必要があります。

宮古島やその群島中の伊良部島・下地島でサシバのことを尋ねて歩いたことが

あります。聞いたところによると、秋の運動会の季節は、——運動会有一些日はどこの家でも一家総出で見に行くものですが、サシバが飛来したと気づくや、大人たちは運動会を放り出して、サシバ捕りに行き、皆いなくなってしまうというのです。現在は、サシバを捕獲することはもちろん固く禁止されています。全島民理解をし、そういうことはないわけですが、かつてはサシバの飛来が、興奮をもたらしたようすをこうしたエピソードが伝えています。

サシバが、秋になると訪れて来る貴重な食料となっていたためです。鍋ものにしたとのことです。

捕獲の仕方は、次のようです。各家々では、叢林の中の、樹木を決めていて、その木の上に簡単な小屋を造っておく。前からとっておいたサシバを一羽、梢にとまらせておく。その鳥は、できるだけきれいなサシバがよい。それが美しいと、たくさんのサシバが降りて来るというのです。罠で呼び寄せる狩猟方法です。

サシバたちは、沖縄を飛び立って、海上休まずに飛んでくるので、宮古群島、中でも伊良部島に多くが飛来するのですが、ようようたどり着いて、叢林の梢でねむりについてしまう。闇が訪れるのをじっと待って、島民は、その小屋から手を伸ばし、ねむりに落ちているサシバたちを素手で捕まえるのだそうです。宮古群島の多良間島出身の奥さんをもつ人に訊ねたところ、多良間にいた頃父親がよく竿に縄をつけて、サシバを取りに行っていたとのことです。群島の島々では至る所で、なされていた古来の習慣だったようです。みな食べるために夢中になって、以前は捕獲に精を出したとのことでした。

古い写真があります。撮影したのは、ハワイ生まれのサムエル・H・キタムラという方です。キタムラ氏は、太平洋戦争後、米軍の通訳として島を訪れ、当時の宮古島の風景を撮影して残しました。これは宮古島のある村の中。年代は昭和30年代。御手許の資料に掲載の写真3と映像の写真2は同じときの撮影です。

写真2では、複数のこどもたちが、撮影者の前に集まっています。カメラを構えているのはキタムラ氏でしょう。それでこれは別の人が撮ったものです。男の子たちのランニングと白い短パン姿。女の子のおかっぱ頭は、サザエさんのワカメちゃんのような格好で、ちょうど、私の子供のころの、昭和のこどもたちがこういう姿でした。

写真3は、カメラを構えたキタムラ氏が写したもので、二人のこどもが並んでいます。一人の子の右手には鷹がいます。これがサシバ。見ると、サシバのそ



写真2

写真3 (右) 子どもと鷹のあそび 宮古島 昭和30年代
撮影サムエル・H・キタムラ



の足には紐がつけられ長く垂れさがっています。この紐で、凧をあげるように、サシバを空に飛ばして操るのがこの島のこどもたちの遊びでした。島ではそういうことはよくあり、親が、捕獲したサシバの中から、一羽を子供に与えるとのこと。もっとも、聞くところによると、サシバは野生なので、なかなか餌を食べずに弱ってゆくことが多かったとのこと。それでは、そのサシバは逃がしてやるのかと、たずねますと、私が聞いた範囲では、それは食べたということでした。ともあれ、山のない、獣のいないかつての島の生活は、秋に大挙して降りて来るサシバを待ち望んでいたのです。

二 ノロの海蛇漁 久高島

つぎの写真は、那覇の公設市場の店先に売っているイラブー（海蛇）の燻製です。丸くなっているのと長いまま置かれているのと、一匹ずつ6000円前後の値札がついています。海蛇は、高級料理で、野菜などと合わせてスープにします。琉球王朝の時代、海蛇の捕獲を許されているのは、久高島の久高ノロや外間ノロなどに決められていました。

久高島というのは、御存知の方もいると思いますが、神高い島といわれています。島の風景の一つをお見せします。アダンとクバが両脇に茂る岬への一本の道です。

もう一枚は、大正時代の久高島の久高ノロの写真です。折口信夫『古代研究』



写真4 (2枚とも) 那覇牧志公設市場のイラブー

の挿絵からの転載です。

御嶽^{うたき}の入り口あたりでしょうか。白い神衣を着て大きな扇を手にもち草の冠をしています。神祭りのときの姿をした位の高い久高ノロです。島には、かつて外間ノロ・久高ノロがいて、この巫女の家が、イラブーの採取の権利をもっていました(比嘉康雄『神々の原郷——久高



写真5 久高島 アダンとクバの岬への道

島』上下)。祭りをつかさどる女性神職者をノロと言います。実際にイラブーを捕るのは村頭の妻二人(外間側久高側)で、それに久高ノロ家が雇った婦人一人ということで、女性が採取をするわけです。捕獲場所であるイラブーガマの写真によって位置をみますと、崖の上に立つ人の、向こう側に、降りてゆく岩陰の水際でとると、手前の水辺との二か所で海蛇を捕まえるというのです。

10年ほど前には、その崖の上に、捕獲したイラブーをいぶす燻製小屋がありました。もう使われなくなって、年々形がくずれ風化してしまい、いまでは小屋の跡形もなくなりました。(村の拝所のところには、燻製小屋はまだ一つ残り使われています。)

旧暦6月から12月までの間が採る時期で最盛期は旧8・9・10月になります。わたくしは、もう20年ほどまえのこと、イラブー捕りをしてきた島の一人の老婆から、捕獲の仕方をおしえてもらったことがあります。そのときの話を思い出



写真6 大正時代の久高ノロ 折口信夫『古代研究 民俗学篇1』より



写真7 イラブーガマ 採集生活そのままの原始的漁法が巫女に維持されてきた。



写真8 イラブーガマ

しますと、月の輝く夜に、隆起サンゴの尖った岩を手でつかみながら（危険な場所です）、水辺に降りてゆき、白い砂底にさわさわと幾重にも打ち寄せるしき波に、月の光が揺れる水の影の下を、海から足元に訪れて来るイラブー。それを、ノロの手の者（女性）が手ですくってつかむのだそうです。もっと古くは、ノロ自身がつかんでいたのでしょうか。

海蛇は、ハブの7-80倍の毒をもつといいますが、蛇だと、頭をつかむと、腕に巻き付くことがあります。かつて小宝島（鹿児島県トカラ列島）で潜水をする者から、聞いたところによると、海蛇は掴んで、水から上げてしまえば、絡みつくことはないそうです。ともあれ、老婆が月の夜に白砂の海辺で、静かに毒蛇を自ら掬い上げる漁法は、神秘以外の何ものでもありません。

王朝から認められた高位の巫女が、猛毒のイラブーを捕獲管理するのはその宗教的高さ（セジの高さ）を示すことでしょう。

*ちなみに、石垣島川平村の、もとの村があった小高い丘に群星御嶽という村で最も神聖な拝所の森がありますが、その前の畑の中に、忘れられたように植物が繁茂するこんもりとした場所があります。そこは、か

つて、村の巫女であるツカサ（沖縄本島というノロにあたる）たちが、毒蛇のハブを掌にのせて遊んだ場所として、開墾をまぬがれています。ハブを意のままに扱う巫女たちの靈威を証明し誇示する記念の藪です。毒を制する力を島の巫女たちは持ち、神威を体現していたのでした。ツカサたちは、聖なる女性への幻想を実践的に創り出していたようです。

宮古島の鷹と久高島の海蛇のことに戻します。ここで問題としたいのは、行われて来た捕獲方法がきわめて伝統的で素朴・原始的なことです。掲載した年表（後掲）は、沖縄の高校で現在使用されている教材（『琉球沖縄史』）で、ここに沖縄の歴史の概略を示してあり、沖縄ではよく知られている知識です。11世紀ころまでの沖縄は沖縄本島においては貝塚時代、先島では先史時代であり、日本でいえば平安時代にあたるそのころ沖縄は、自然採集生活から農耕時代へ移ってゆきます。本土にくらべて歴史的発展が遅い、そのことは重要なことで、沖縄に、採取時代の古い信仰・習俗・心理などが消されずに残されてきた可能性を高めています。宮古島や伊良部島の島民が飛来するサシバを手で捕獲したことや、毒性の強い海蛇を素手でとらえる久高島のノロの漁などは、原始的採取技術を残したものと理解できます。神を祀るノロは、古い信仰を維持する存在であるために、原始漁法を維持していて、いま述べましたように、それは月明かりの下での、神秘的・幻想的な作業と言えます。巫女のもつこうした原始性は、巫女を柱にして機能する村の祭祀が、沖縄の信仰の核心にあることからして、沖縄をいまに幻想的と感じさせる一因としています。

これらのことは、沖縄自体が幻想の装いを帯びること、特に巫女への信仰は、沖縄人自体が幻想することといえます。

三 榊の木 津堅島

日本人の先祖の移動を探る研究は早くから行われていました。沖縄諸島の民俗学上の意義を発見した柳田国男が、わたくしたち日本人の祖先は何を目的にして、波濤を渡ったのかを研究したことはよく知られていて改めて申す必要はありません。八重干瀬（宮古島北方の幻のサンゴ礁）がタカラガイの宝庫であることから先祖はその入手を夢見て海を渡ってきたというのです。史前植物としての榊を見出した折口の幻想も、榊の移動についての柳田の考察をも含めて、柳田の指



写真9 榊の木のこと 津堅島

針の範囲に収まります。その上で、折口は沖縄に日本の古代を髣髴とさせる古代文化・信仰の残滓を見出してゆきました。

海の方からやってくる異形の姿となった先祖や、草を身にまとった夜光貝の目をもつ背の高い来訪神や、女が香炉を以て移動することや、島全土にわたる巫女の靈

性の信奉されていることや、島人の誰にも強く意識されている靈魂信仰の実感と実行、琉球王国の出自や神話等々の中に、古代日本と通じる基層の信仰を見つけてゆくのでした。

写真9は、津堅島の全容です。少しだけ丘のある平たい島です。沖縄本島の勝連半島の先端から渡ります。

折口は、大正10年沖縄旅行のとき津堅島に渡っております。そときの島の見聞を書きとめています

○折口信夫「沖縄探訪手帖」大正10年7・8月 津堅島くぼお嶽に上る。区長伊覇恩亀の案内で。

「くぼ御嶽に上つた。そのまへに荒川城があつて、この島はじめた人の骨^{コチ}みたまだといふのが、洞の中に今は雨をよける為、小石を積んだ隙から、されかうべや肋骨が沢山見える。」（「沖縄探訪手帖」）

写真10はアラカー御嶽の現在の様子です。かつて亡骸が風葬されていたのは、右奥の洞窟の暗がりにはですが、人骨（こちみたま）はいまは取り払われています。写真11は、アラカー御嶽の脇から上ってゆくクボウ御嶽の中に立つ案内板（植物群落の説明と全体図）の写真です。

○「くぼお嶽といふが、蒲葵の多いのは、仲のお嶽で、此の方には、此木は見えぬ。蒲葵の葉でも、何でも御嶽の物は、それぞれの根人の許に三日おいて、お下りとして貰うことになって居る。」（折口「沖縄探訪手帖」）

当時、折口は、くぼ御嶽に行くにあたり、うたきの名である「蒲葵の木」について、気にとめていたことがわかります。他の木には言及していません。ところが、^{たぶ}榎がこの杜の奥には多数あるのです（現在。おそらく大正の頃も）。



写真10 アラカー

見落とされたくぼう杜のたぶの木々

折口が榎の知識をもっていたことはつぎの記事で知られます。

○大正12年7月26日『沖縄採訪記』に、安里八幡のゆたのあげる線香が、「炭の粉と香木（赤たぼ・^{コウギイ}白たぼなどといふたぼの皮の粉にしたもの）の粉でこしらへた」



写真11 クボウ御嶽 津堅島

折口は、沖縄へ生涯に三度出かけましたが、日本人論としての榎の意義を発見するのは、最初の沖縄旅行の7年後、慶應義塾大学教授に就いた年の能登の旅でのことでした。そのことを『古代研究民俗学篇2』の「追ひ書き」において述懐しております。以下簡単な年譜と追ひ書きを掲出しておきます。



写真12 クボウ御嶽の森のノロの墓
神聖と死は同じ場所に存在

○折口の沖縄旅行 3回

大正10年7月16日那覇着。久高島・津堅島探訪。国頭地方に



写真13 現在のくぼ御嶽の杜のたぶの木 根元に祈願のあと

1週間滞在。帰途、壱岐島に渡る(8月23日～9月中旬)。旅中、『沖縄探訪手帖』を記録。

大正12年7月18日沖縄へ出発。本島。宮古島数時間上陸。20日八重山滞在。登野城のあんがま実見。9月1日基隆経由で門司着。

昭和2年6月20日から、松本・富山・金沢を経て能登羽咋郡・鹿島郡を探訪旅行。能登一ノ宮の藤井家を訪ねる。

昭和3年4月慶應義塾大学文学部教授となる

昭和3年12月初旬 藤井春洋と能登

半島に探訪旅行。『古代研究』口絵写真のため、たぶの森の写真を撮る。

昭和4年4月 『古代研究 民俗学篇1』『古代研究 国文学篇』

昭和5年6月 『古代研究民俗学篇2』

昭和10年12月15日出発。20日那覇着。那覇・名護・久高島・伊平屋島・伊是名島。23日那覇発。

○折口『古代研究民俗学篇2』「追ひ書き」

「たぶの」写真の多いのは、常世神の漂著地と、其将来したと考へられる神木、及び「さかき」なる名に当る植木が、一種類でないこと、古い「さかき」は、今考へられる限りでは、「たぶ」「たび」なる、何回から移植せられた熱帯性の木である事を示さう、との企てがあつたのだ。殊に肉桂たぶと言はれる一種が、「さかき」の香ぐわしさを、謠ひ伝へるやうになつた初めの物か、と考へたのである。殊に、二度の能登の旅で得た実感を披露したかつたのである。」

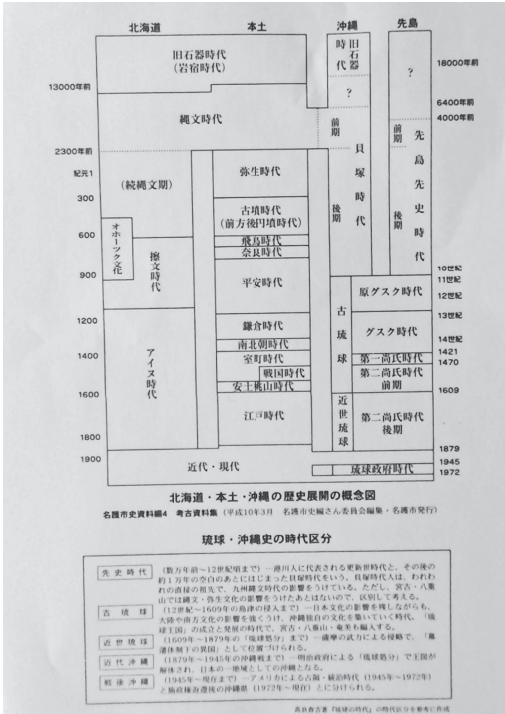
ここにいう肉桂たぶはニッキを考えているのでしょうか。シナモンもその一種で香りが強いものです。実際には、これと、日本のタブノ木とは同族の種ではあつ

でも、少し異なります。タブは、線香の材料になっているように香をもつ木ですが、その香りは淡く、ニッキのような強い芳香を放つものではありません。その点の修正を必要としますが、香りの木として榊を見出し、日本の神をまつる榊の源流としての樹種を想定しようとしています。

ただ、津堅島に出かけた時、折口は榊を見落としたようです。日本人論としての榊の意味を、大正時代の沖縄旅行の折にすでに認識していれば、津堅島くぼお御嶽の杜のタブの木に気づいたはずです。そうすれば、島の神の杜の樹木としての意味を、沖縄から能登への黒潮・対馬海流に沿った海の道筋の中で、語る事ができたはずです。遠い時代に、わたくしたちの祖先が、潮流にのり沖縄を経て本土へ移動した「海の道の物語」を、より明確に捉えることができたのではないかと考えます。

沖縄に幻想を感じる一因として、その島々に潜在する原始性の残存についてみた次第です。

〈関連資料〉



肉桂 ニッキ

『琉球・沖縄史』



能登気多。海辺の榊の社。(大穴持像神社)



能登のたぶ 『古代研究民俗学篇1』同2より転載

参考 池田彌三郎『魚津だより』

西村亨「小さなたぶの森の物語」『三田評論』1106 2007年11月